町長室からこんにちは

No.76

一宮町長
馬淵 昌也

先日、千葉日報の「忙人寸語」（9月24日）に、心引かれる記事が載っていました。「忙人寸語」は、朝日新聞なら「天声人語」にあたる、記者の方の短いエッセイの欄です。それは、「県内のとある門前町で、「千葉の本あります」という張り紙を目にした。町並みに溶け込んだ古い書店。興味をそそられ店に入ると、約40年前に地元の郷土史研究会が発刊した本があった。」とはじまる、町の本屋さんの魅力と底力の強さを語った素敵な一文でした。

町もお店の名前も明記してありませんが、一宮町の方であったら、直ちに一宮の、玉前神社門前の三芳堂さんのことだとわかります。記者の方が見つけられたのは、『ふるさと』という、一宮の歴史についての本でしょう。記者の方は、「地元作家の著作もあるらしく、郷土の文化発信地の役割を果たしていると実感した」と記し、「老舗店では郷土の本との思わぬ出合いがあるのも醍醐味だ」と述べておられます。わたくしは、この記者の方の感想にまったく同感です。

三芳堂さんには、店頭の張り紙どおり、地元長生・一宮関係の本のコーナーがあり、わたくしも以前から沢山購入させて頂いています。古い絵図の復刻版や写真集などもあり、記事にもあるとおり、伺うたびに〝わくわく感〟を味わっています。

今、多くの方が、インターネットや、大規模古本店などで本を購入されることが多いでしょう。しかし、わたくしは、地元に地域密着の意識を明確に持った書店が存在することは、本当に大きな宝物だと思っています。本屋さんというのは、単にお店というだけではなくて、小さいながら、地域文化の発信センターなのです。わたくしは、茂原では残念ながら消滅してしまった町の本屋さんが、一宮ではなおも力強く存続して頂いていることに、強い誇りを感じます。

ネットの台頭や活字離れで、全国的に消滅しつつある「町中の本屋さん」。多くの皆さん、特に小学校・中学校・高校の若い皆さんが、「町中の本屋さん」におもむき、本の手触りを感じつつ、そこにしかない特別な香気を感じる機会を持たれることを、心から願っています。